錆びたドラム缶の上に一台のラジオが置かれている。
銀に光るアンテナを青い空に突き立てた、一見何の変哲もない旧式ラジオ。
大小の摘まみやメーターが幾何学的に配置されたそのラジオから、ノイズ混じりの音声がもれてくる。やたらとハイテンションな若い女性の声だ。
『ハーイ今週もはじまったっすトレジャーアイランド！
毎週聴いてるボーイ&ガールにはすっかりお馴染みっすけど、ビギナーリスナーの為にかるーく説明しちゃうと、この番組は大陸中で活躍する賞金稼ぎならびに賞金首の活躍をリアルタイムでドラマティックに！　カタルシスに！　スキャンダラスに！　実況しちゃうってゆー主旨の娯楽情報番組っす！　業界ナンバー1視聴率はだてじゃねっす、コレさえ押さえてればラジオの前のボーイ&ガールも今すぐ賞金稼ぎデビューできるっす！　パーソナリティーは今をときめく美人賞金稼ぎ、ピンクパンサー・スタンがお送りするっすヒャッハー！』
美人を自称するなよと心の中でツッコミを入れる。うるさい女は嫌いだ。しかもその馬鹿っぽい語尾はどうしたことだ、クスリでもキメてやがんのか、キャラ作りの失敗か？
胸ぐら掴んでヤキ入れてェ。
兄の付き合いで漫然と聴いてるが、今日ばかりはラジオから垂れ流されるキンキン声が耳障りだ。
スワローは腰に差したバタフライナイフに油断なく手を添え、フィールドを眼光鋭く睥睨する。
黄褐色に乾燥した岩盤を掘削した広大な採石場には、置き忘れられたドラム缶や重機、山積みにされたセメント袋にプレハブ小屋などが無秩序に点在している。
周囲は切り立った断崖だ。
雄々しく屹立する断崖の真下、起伏のある地形にへばり付くよう採掘を行っていたのだが、それも数年前に中止され現在はまったく人けがない。
採石場が放棄された経緯は知らない。
コヨーテや狼がでたとか岩盤の崩落事故が多発したとか、大方そんなところか。放射能が基準値を上回って人足が逃げ出したのかもしれない、ここはもう汚染区域に近い。不慮の事故や動物、および賊の襲撃で無人の廃墟と化した工事現場など近年珍しくもない。
「相変わらずかくれんぼだきゃ得意だな。逃げ隠れが上手いのは臆病者の証拠だ」
スワローは高々と積まれた土嚢の後ろに隠れて、そう遠からずどこかに潜む敵の気配をさぐる。
付けっぱなしのラジオからは癇に障る甲高い声が、場違いな陽気さで流れ続けている。

『最初のおたよりはー……カクタスタウン在住のラジオネーム・好きな飴はグレープのジニーくん。質問です、賞金稼ぎの詳しい仕事を教えて！　大人になったら賞金稼ぎになりたいんですがどうすればいいですか？　バンチを読んで勉強してるけどよくわかりません、どうやったらピンクパンサー・スタンさんのようなかわいくてかっこいい最高にクールな賞金稼ぎになれますか？　お母さんやお姉ちゃんはキケンだからやめろっていうけど絶対諦めません、超強くてかっこいい賞金稼ぎにおれはなる！』

ぜってぇ盛ってるだろ。それにしても聞き覚えのある名前……気のせいか。頭の片隅にひっかかったラジオネームを振り捨て、眼前の戦場に集中する。

『ジニーくんは賞金稼ぎに憧れてるんすね、ハガキからあふれんばかりの情熱が伝わってくるっす。賞金稼ぎといえば子どもたちの憧れナンバー1職業、当たればどでかい花形っすもんね！　悪党どもがはびこる腐った世の中じゃ需要は増せど途切れず、食いっぱぐれることねっす。キケンな仕事だからお母さんたちの心配もわかるっすけどね～ユーハブアドリームネバーギブアップ、その意気ゴーゴーっす！

えーとそれで、賞金稼ぎになる方法っすか……お答えするっす!!　ここでおさらいっす。賞金稼ぎは人種性別年齢不問、すべての人類に広く門戸を開け放ってるっす、来る者拒まず殺る気重視カモンベイベの精神っす。下剋上成り上がり裏切り出し抜きなんでもあり、スリリングな駆け引きが日常茶飯事のハードな業界っす、実態はものっそいブラックっす、人的消費がパねっすからね！　運と実力がねーヤツはそりゃもーザクザク死んでくっす、序盤であっさり脱落っす！　戸籍がなくて困ってるそこのキミ！　免許の申請時に仮戸籍がもらえるんで安心するっす、むしろそっちめあてにめざす人も少なくねっす。戦争からこっち政府も正確な国民の数を把握してないんスよね、ザルなお役所仕事っす！』

そう、俺達みたいに。心の中で皮肉っぽく嘯く。

母は娼婦だ。十代半ばで兄弟を生み、何があったか知らないが、それ以降トレーラーハウスを転がして大陸中を西へ東へ流浪している。一か所に定住すれば戸籍を取得し保障を受けられるが、根無し草の旅暮らしではそうもいかない。保険が使えないので誰かが熱を出して寝込んだ時は、母の知り合いのヤブ医者を頼るか、自力で寝て治していた。幸い体力と悪運に恵まれているので風邪をこじらせた試しはないが怪我の方は絶えない。日頃の行いが悪いのだ。

『賞金稼ぎになるにはまず中央（セントラル）に行くっす！　正式名称は中央保安局っすね。保安局は知ってるっすか？　そこそこの規模の街ならどこにでもあるアレっすよ！　悪党を拘留

したり懸賞金を申請したり……そうそう、ヴィクテムの更新手続きもここで行うっす。でも免許をもらうには中央に行かなきゃダメっす！　そこの面接官に認められて、簡単な実技のテストをクリアして、初めて賞金稼ぎになれるっす。コングラッチュレイション！』

面倒くせえな。まどろっこしい手続きはスワローが最も苦手とするところだ。

『実技試験は近接格闘と射撃と逮捕術、あと一芸奨励制度っす！　たとえばミュータント！　ジニーくんの周りにもいるっすかね、けもみみやしっぽが生えてたり鱗があったりトカゲ頭だったり……戦争中に政府の極秘研究所から逃げ出した被験体の子孫とか、ウィルス感染による突然変異の新人類だとか諸説あるっすけどね。そーゆー人たちの中には鋭い牙や爪を出し入れしたり、水中でエラ呼吸できる能力者がいるっす。で、そーゆー特殊スキル持ちはこの制度の恩恵に預かって採用されやすいっす！』

底抜けに明るく能天気な声が、断続的に混じる砂嵐にブツ切りされながら、ご丁寧に解説してくれる。

俺達が三年前に倒した賞金首も、保安局に引っ張ってきゃ賞金もらえたのかな。小物だから雀の涙だろうが、自警団の陥穽にはまってとりっぱぐれたのがちょっと惜しい。

などと思案を巡らせつつ、土嚢の影から用心深く顔を出す。

刹那、手前の地面が抉れて砂塵が舞う。

「！　ちっ、」

舌打ちをくれ慌てて引っ込む。外した？　牽制？　どっちだ。この際どっちでもいい。動体視力が追い付かない凡人には唐突に地面が爆ぜたように見えたろうが、今のは小石の直撃だ。遠方から投擲された小石が、スワローからほんの数インチの地面に撃ち込まれたのだ。

「野郎、どっから狙いやがった」

狙撃手はどこだ？　姿を見せず逃げ隠れし、時折思い出したように小石を撃ち込んでくる卑劣なヤツめ。

スワローにとっては不幸な事に、あたりには手頃な小石がゴロゴロしており当面弾は尽きない。

ラジオにザザッと砂嵐が混じり、一陣の風が峡谷を吹き抜ける。

『ねっ簡単っしょ？　賞金稼ぎになりたいならカモーンベイベ、新しい仲間はオールタイムウェルカムっす！　でも一つアドバイスっす、未成年のボーイ&ガールは親御さんのＯＫをちゃーんともらった方がいいっす、じゃないと後々揉めるっす！』

賞金稼ぎに年齢制限はない、やる気と素質さえあればだれでもなれる。年齢に限らずあらゆる縛りが緩いのが魅力で、犯罪者上がりの賞金稼ぎもゴロゴロいる。まあ同じだけ賞

金稼ぎくずれの犯罪者が多い現状なのだが、それはそれとして。

『かくいうアタシも家出同然にでていって、親に勘当中の身の上っす！　こんなじゃじゃ馬に育てた覚えはない、婿の来てがなくなるって、パパンもママンもぷんすこお怒りっす！　二人ともアタマ固いンすよねー、賞金稼ぎは良家の子女がなるもんじゃない、ゴロツキどもの巣窟だなんて……そーゆーのが多いのも事実っすけどね！』

賞金稼ぎは世間でメジャーな花形職だが、一方では保守層の偏見も甚だしい。前科持ちも相当数いるので、軍隊や警備会社と同じく、脛にキズのある人間の受け入れ先の側面も強いのだ。

だんだんじれてきた。いつまでこうしててもらちが明かない。元々逃げ隠れするのは性に合わないのだ。そんなスワローの内心を読んだかのように、眼前の地面に次々と穴が穿たれる。敵の攻撃だ。

「はっ、誘いだそうって魂胆か？　いっちょまえに挑発たァ笑わせる」

いいぜ、のってやる。売られた喧嘩はノシ付けて買う主義だ、アイツの考えてる事など手に取るようにわかる、何年一緒に暮らしたと思ってやがる。スワローは雌伏の時を脱して鮮やかに反撃に転じる、土嚢から飛び出すや風切る唸り上げ連続で撃ち込まれる小石を前転で回避、右手に構えたナイフで弾道をずらし敵陣地に突入する。

焦ったのは敵方だ。なんて無茶なヤツだ、策も何もなく頭から突っ込んでくるなんて……いや、策はあるのか？　どっちだ？　わからない。素晴らしい瞬発力と脚力を発揮、自分の縄張りを抜けて敵陣地を突っ切るスワローが絶叫する。勝利宣言にも似た傍若無人な高笑い。

「飛び道具が手持ちにねーから遠距離戦は不利だと思ったか、お生憎様だな！　下手な鉄砲数撃っても当たンなきゃ意味ねーぜ！」

すぐそこで哄笑が爆ぜる。まずい。ナイフは遠距離戦に不利、今回ばかりはこちらに分があると高をくくっていた、とんだ思い上がりだ。慢心と過信は身を滅ぼす、油断はなお悪い。気を引き締めてスリングショットを構え直し、次々と小石をつがえる。大丈夫、ストックはまだたくさんある。ここは採掘場、小石は山ほどある。しっくりと手に馴染むスリングショットを正面に向け解き放つ、狙い定めた小石が一直線に飛んでいく、その全弾がスワローの肩や肘や膝を紙一重で掠めていく。惜しい、当たらない。あともう一息なのに……当たっても即死はないだろう、たぶん。手加減したらこっちがヤられる。目標を逸れた小石が後方の地面に穿つ、抉る、砂礫が舞う。スワローが弾の行方を見極

め、咄嗟に小石を握る。
「そこだ！」
「うわっ!?」
全力で腕を振り抜き投擲、ショベルカーのコックピットに小石が当たって火花が散る。首を引っ込めたおかげで間一髪額が割れずにすんだが危なかった。バレた！　スワローが猛然と迫ってくる。巨大な油圧ショベルは絶好の隠れ家だが、そろそろ出なければ追撃される。採石場全体をフィールドにした、命がけのかくれんぼだ。
「くそっ……」
捕まったら何されるかわからない、逃げるが勝ちだ。コックピットを飛び下りて左右を見渡す。絶賛放置プレイ中のラジオが勝手にくっちゃべる。
『いい子のみんな～ピンクパンサー・スタンとお約束っす！賞金稼ぎになる時は必ずパパンとママンのＯＫをもらうっす、そのほうが後腐れなく成り上がりに邁進できるっす！ジニーくんもお母さんとお姉ちゃんを死ぬ気で説得するっすよ、どーせなら家族に応援してもらったほうが嬉しいしヤル気もでるってなもんっすよ！』
わかってるよそんなこと！　さらっとできたら苦労はない。スリングショットを片手に持って逃げる、逃げる。セメント袋を跳び越えて、障害物のドラム缶をかいくぐり、地を蹴ってひたすら走る。
『ひょっとしたらほら、ステキなダーリンと運命の出会いがあるかもしれないし？　悪党どもに囲まれて絶体絶命乙女のピンチ、そこに颯爽と窓ガラスをぶち破って、助けにきたよベイビーとお姫様抱っこ……キャーッロマンチックが止まンねっす！　とりまそーゆー時の為にも親の承諾取り付けとくのが吉っす、これちょー大事なアドバイスっす』
ラジオ向こうのパーソナリティーがのべつまくなし妄想をまくしたてる。少しでも時間を稼ごうと振り返りざまポケットの小石をつがえて撃ち放つも容易く躱される、憎たらしい事に完全に弾道を読まれている。抵抗虚しく足を蹴りだすごと距離は縮まっていく。足の長さが違うのか？　認めたくない。背丈を越されたのは一年前、成長期に入ってから声も骨格も格段に男らしさを増した。
「はあっはあっはあっ……しつっこい、いつまで追ってくるのさ！」
「きまってんだろ、仕留めるまでだ！」
いきりたった声が背中を鞭打つ。すぐそこ、うなじに吐息がかかる距離にスワローが肉薄するのに焦り１インチでも引き離そうとがむしゃらに死力を絞る。
「ッ!?」
うなじに一筋冷気が駆け抜ける。スワローがナイフを一閃、

鋭利な切っ先が首の後ろを掠めたのだ。
後ろ髪がちぎれて宙を舞う。頸動脈を切断されたら……想像したくもない。背後に押し被さる気配は飢えた獣のそれ、捕食者の脅威に等しい。遠距離戦なら勝ち目があると思い上がった油断が祟った、半分は同じ遺伝子なのにスペックが違いすぎる。
「ほらほら、ケツ振って逃げろよ！　よちよち歩きじゃすぐ追い付かれちまうぜ小鳩ちゃん！」
スワローは容赦なく敵を追い詰める。狩り立てる高揚に舌なめずり、全身の細胞が沸騰するような歓喜に咽ぶ。ナイフの扱いはこの一年で素晴らしく上達、今では目を瞑って指の間に刺すこともできる。
「くそっ……調子にのるなよ！」
「捨て台詞だきゃ一人前だな、レイプ魔から逃げる生娘のような震え声じゃびびんねーぞ！」
「相変わらずたとえが最悪だな、下劣のきわみだ！　品性を手洗いして出直してこい！」
「そりゃどうも、育ちが悪いもんでね！　いまさら揉み洗いしたって性根の汚れはとれねーよ！」
「手癖と足癖と噛み癖の悪さも矯正しろ！」
「おまけに口輪も付けてくれ、手首ごとがぶって食いちぎってやる！」
斜面を滑ってさらに逃走しようとしたその瞬間―
視界ががくんと揺れ、足元の地面が消失。
「え？」
斜面の下に大穴が穿たれている。穴の側面はすり鉢状に傾斜し、さながら蟻地獄の相を呈す。しくじった！　悔いた時には既に遅く、視界が反転して青空と地面とがめまぐるしく入れ替わる。
「うわああああああああああ！」
絶叫が尾を引く。体のあちこちを打ち付けて痛い。足を滑らした勢いに乗じ、穴の底までもんどりうって転げていく。
『賞金稼ぎはキケンがいっぱい、注意一秒怪我一生、地獄への片道切符が大安売りっす！』
パーソナリティーが何か言ってる。耳鳴りが酷くて聞こえない。転げ落ちたはずみに口の中に砂利が入った。しきりに唾吐き上体を起こそうとするも、視界に金属の光がきらめく。
「チェックメイト」
起き上がりかけた体が引き戻され、モッズコートの裾が縫い止められる。地面に突き立ったナイフの柄が撓む。尊大な足音……スニーカーの靴底で砂利をにじり、大股に近付いてきた何者かの影がさす。
死に物狂いで裾を引っ張るもナイフが抜けずパニックをき

たす、冷静に判断すればスリングショットを握るのと反対の手でナイフを抜けばいいだけだが、それすら思い至らない。ビリッと嫌な音がして裂け目が広がり泣きたくなる。
「あぁあ……俺のコート……」
足音が途絶える。地面に仰向けのたうつ敵へ悠然と歩み寄り、肩を掴んで組み敷く。
片手でナイフを抜き、それを素早く翳して頸動脈にあてがうや、やさしく目を細めて微笑む。
太陽の光をたっぷり吸った玉蜀黍の房を思わせるイエローゴールドの髪は、ろくに手入れもしてないせいでボサボサにはねまわっているが、かえってそれが野性味あふれる雄のフェロモンを付与する。
まだ14になりたてだが、身長ははや170台の半ばに達した。本人曰く夜寝てると骨が伸びる音が聞こえるらしいが冗談だと思いたい。綺麗な稜線を描く眉、高く秀でた鼻梁と薄い唇、品良く尖った顎。激情に燃える赤錆の瞳が一際鮮烈な印象をもたらす、凄みのある美少年だ。
半袖シャツから突き出た右腕の刺青は荊の冠を戴く燕、左腕の刺青は天使の輪を冠した鳩で対になっている。
兄の首筋をぺちぺちとナイフの表面で叩き、もう片方の手でドッグタグを引き抜いて奪い取り、大いに勝ち誇って嘯く。
「いっちょゲット。勝負あったな」
「……おっしゃるとおりで」
戦利品を弄んで高らかに宣言するスワローに、地面に倒れたままのピジョンは両手を挙げて降参した。

「スパムにする？　コンビーフにする？」
「ピーナッツバター」
「コンビーフね」
「はァ？　なめてンの？」
「ピーナッツバターは切らしてるんだ」
スワローが露骨に舌打ち、吸いさしの煙草を放り投げるのを見もせず半歩どいて回避。
流しに不時着した煙草がジュッと音をたて消える。
ピジョンは水浸しの煙草をさもいやそうに摘まみ、カウンター端の灰皿にもっていく。
「ちゃんと灰皿に捨てろよ」
「てめぇが灰皿だろ」
「ヤキ入れられて悦ぶ趣味はない」
簡単に手を洗ってキッチンナイフを握り直すピジョン、これも毎度のやりとりだ。
キッチンに立ち料理の支度をするピジョンの後ろ、キッチンテーブルに行儀悪く片足をのせ下品な雑誌に目を通すス

ワロー。
暇する弟を振り返り、食パンの耳を丁寧に削ぎ落としがてら苦言を呈す。
「やることないならちょっとは手伝えよ」
「やなこった。負けた方が当番をやる、そーゆー約束だろ」
「もう91回連続だよ……」
「恨むんなら自分の弱さを恨め」
仰る通りごもっとも。スワローの回答は身も蓋もない。
ピジョンはため息を吐き、清潔なキッチンナイフでパンを切っていく。モッズコートは脱いで今はシャツとジーンズだけのカジュアルな部屋着だ。
トレーラーハウスの台所は狭いが使いやすく整頓されている。主に几帳面なピジョンによる日々の努力の賜物で散らかすのばかり得意な母や弟に任せればあっというまに混沌係数が上がって惨状を呈す。
キュウリのピクルスを詰めた広口の瓶、各種香辛料の小瓶、シリアルの袋と小麦粉の袋とパック入りの牛乳……調理器具や食材も、すべて手の届く範囲の戸棚やカウンターにこぢんまりおさまっている。ピジョンがまめに整頓を行う成果だ。床下の貯蔵庫および戸棚の奥には大量の缶詰がストックされている。
一家の主食は缶詰をメインとする保存食や乾燥食が多く、新鮮な野菜や果物が食卓に上るのはまれ。なにかの祝い事を除いてそうそうない。
戦火で枯渇し貧相に荒れ果てた大地では作物が育たず、ノウハウを秘匿する一部の農家を例外とする巷では生野菜の値が高騰している。ハンバーガーから輪切りのトマトや瑞々しいレタスが姿を消してすでに久しい。ピジョンたちの食事が特別質素というわけではなく、この時代の中の下家庭の平均といえる。
うちはいいとこ下の上だけど、とピジョンは心の中でのみ付け加える。
表面に丁寧にマーガリンとマスタードを塗り、缶詰の蓋を開け、塩漬けの干し肉……コンビーフを盛っていく。
「食事の前にポルノ雑誌読むなよ。どういう神経だ」
「腹が減っては火遊びできず」
「肌色しかない猥褻図書を散らかすのもやめて。足の踏み場がない」
「ここはテメェの城か？　違う、俺の家だ。だったら縄張りを好きに飾ったってバチあたらねーな」
「片付ける苦労も知らないで……」
「散らかすのは俺の役目、後始末はお前の役目。俺は食い散らかすの担当、テメェは床におっこった食べかすを摘まんで食う担当。俺がお行儀よくしたら浅ましくおこぼれ期

待する残飯処理係の取り分がなくなんだろ？」
「踏ん付けて滑って転んだら大変だろ」
「やっかんでんの？　スコアは92戦92敗だっけ」
「92戦91敗1引き分けだよ」
「あァん？　寝ぼけたこと吹かしてんじゃねーぞ、いつ引き分けた」
「一回ジャンプの拍子にすっぽ抜けたじゃないか」
「で、珍しくツイてたお前がまんまとゲットしたと。先にドッグタグ取った方が勝ちってルールだろ、落としたのは対象外。敗けた方が食事当番を代わる罰ゲーム付き、おかげ様でこちとらラクできる」
スワローが意地悪く笑ってからかうのを無視、ふくれ面で調理を再開する。
余談だが引き分けとなった一戦後は二人仲良く押し合いへし合い小突き合い、喧嘩しながら炊事を分担した。
料理は当番制で、ピジョンとスワローが一日ごとに交代している。母は朝が遅く大抵昼過ぎまで寝ているので台所に沸くのはレアだ。たまに朝早く起き出した時など「よーしママがんばっちゃうぞ！」とはりきって料理を手がけるが、気合が空回りしてろくなことにならないので、「心配しないでゆっくり寝ててよ母さん」とピジョンが宥めすかし追い返す始末だ。
とりあえず食材を狩るところから始めるのをどうにかしてほしい、護身用のショットガンが泣く。
「お前ってヤツはちょっとは兄さんに花持たせようと思わないのか」
「手加減されて勝って嬉しい？」
正論を返されぐ、と詰まる。手心を加えられても虚しくなるだけだ。
ポルノ雑誌のオールヌードを見ながら、スワローは平然と言い返す。
「オイオイ忘れんな、いいだしっぺはお前だ。ちょっとでも喧嘩が強くなりてえから鍛えてくれって泣いてすがり付く兄貴の頼みを快く引き受けて毎日特訓に付き合ってやってんだ、こんなデキた弟ほかにいるか？」
「それは……感謝してる」
「ホントか」
「ホントに」
「心がこもってねぇ。リピートアフタミー」
「ああ感謝してるよこんなデキた弟を持って俺はサイコーにツイてる世界一の幸せ者さ！」
やけっぱちに喚いてキッチンナイフを乱暴に使う。スワローの勝ち誇った高笑いが響いて最高にむしゃくしゃする。弟に当たるのは筋違いだと頭じゃわかっているがどうしよう

もない。
スワローの言うとおり今を遡ること一年前にピジョンの方から鍛えてほしいと頼み込んだ。
突っぱねるかと身構えたスワローは意外にもあっさり了承し、以来毎日の稽古が続いている。
特訓といってもやってることは泥臭い組み手の延長線上の鬼ごっこだ。
ただしこちらはなんでもあり、武器の使用も許可されたデス鬼ごっこだ。
ある時はガソリンスタンドで、ある時は赤茶けた荒野で、ある時は路地裏で、ある時は廃車置き場で……ルールは踏襲したまま行く先々で場所を変え、どちらかのドッグタグを没収するまで一対一、時間無制限で行われる。
落とし穴や時限式の仕掛けなど間接的なもの、および腕や足を使った直接的な妨害行為もありだ。ナイフを刺すなど致命傷に至る行為は原則禁止だが、「撫で切りはギリセーフ」とスワローは拡大解釈をしている。おかげで擦り傷や生傷が絶えず、絆創膏と包帯が必需品だ。
スワローはナイフを好み、ピジョンは手作りのスリングショットでこれに抗戦する。毎回ほぼスワローの圧勝でピジョンは煮え湯を飲まされている。成長期に突入しさらに体格がよくなった弟にかなうはずがない。
ナイフの切っ先が掠め、後ろ髪がほんの少し散ったうなじがまだ薄ら寒くピジョンはぼやく。
「毎回頸動脈狙ってくるなよ、寿命が縮む」
「あの程度避けられなくてどうするよ」
「ナイフ使うのはやめてよ、うっかり刺さったらどうするのさ。血は苦手なんだ」
「俺が本気でやってたらテメェは今頃ここにいねえよ。そっちこそ飛び道具は卑怯だぜ、逃げ隠れするのが得意な腰抜けにゃぴったりだがよ、物陰からちまちま撃ってきてイライラする」
「コートを繕う手間も考えてよ、継ぎだらけになっちゃうよ。フランケンコートだよ」
「面と向かう度胸もねータマなしが。男らしく正面からかかってこい」
「接近戦は分が悪い。一定の距離をとって敵を攪乱するのも立派な作戦のうちさ」
「びびって近付けねーだけだろ。間合いに入ったら勝ち目ねーもんな、張っ倒されておしまいだ」
「フィールドの特性を利用するんだ。採石場には盾になるものが沢山あったからね……遮蔽物を利用して行う死角からの狙撃は有効だって、月刊バウンティハンターの養成講座に書いてあった。あんなに早く見付けられたのは予想外

だけど……一か所に隠れてるんじゃなく移動すべきだったかな」
パンの断面に上の空でコンビーフを塗りたくり、噛み合わない会話の合間に反省点をおさらいする。
一体どこまでクソ真面目なんだ。
特訓後にああでもないこうでもないと一人反省会をおっぱじめるのはピジョンの悪習、右から左に聞き流す方はげんなりする。殊勝らしく落ち込む兄に、構ってもらえないスワローは鼻を鳴らす。
「もやしの戯言。腹筋は最高何回？　背筋は十回いかず挫折したんだっけ」
「う、うるさい、俺だってがんばってるんだ。最近は調子良ければもうちょい行くし、腹筋もちょっと固くなってきたし」
「腹パンしていい？」
「いやだよ痛いよ。それで思い出した、俺がベッドの上に貼ったポスター勝手に剥がすなよ」
「しゃらくせぇ。寝る前のイメージトレーニングだかなんだか知らねェが、筋肉もりもりマッチョとにらめっこする俺の身になれってんだ。胸毛を数えて眠れってか？　クソ萎えるぜ、野郎の裸なんか見ても胸糞悪いだけだ」
「だからって上に女の人のヌードポスター貼るのやめてくれる？　目のやり場に困る」
「雑誌の付録なんだよ、捨てたらもったいねーじゃん」
そういう問題じゃない。
「もういい」
愛想を尽かして顔を戻すピジョンにスワローがぐうたら突っ伏して催促する。
「メシはまだかよ」
「だから手伝えって。せめてテーブルくらい拭けよ」
「お手伝いさせたきゃ力ずくでタグを奪え、勝手にすっぽぬけて棚ぼたゲットはノーカンだ。ほらほらどうしたおめあてのモノはすぐそこだ、欲しけりゃ手ェ伸ばしてみろ、まぐれじゃなくても勝てるとこ見せてみな」
スワローがふてぶてしくにやつき、首にかかった鎖を手繰ってタグを引っ張り出す。
露骨な挑発にカッとし、目の前のタグをひったくろうと反射的に手を伸ばすもすげなく空振り。
「くっ！」
指一本触れられもせずひっこめられ臍を噛む。目的の物を掴み取れない現実よりもドヤ顔で笑いのめす弟の態度にむきになり再挑戦、顔の前で揺れるタグに執拗に掴みかかるもピジョンを嘲笑うかのようにすりぬけていく。上下左右にタグを振り回し、兄の追撃を巻きながらスワローが茶化

す。

「あんよが上手、あんよが上手」

「このっ……調子に乗るな！」

反射神経と動体視力ではスワローが一枚も二枚も上手、運動神経が格段に劣るピジョンは分が悪い。その様たるや顔の前ににんじんをぶらさげられた馬かしっぽを追いかけて目を回す子犬、さんざんにやりこめられプライドを足蹴にされたピジョンは精一杯いきがって言い返す。

「何がそんなに楽しいんだ？　俺は全然楽しくないぞ、兄さんをおちょくるのもいい加減にしろ」

スワローが舌を出す。相手にするだけ時間の無駄だ。

料理当番を代わるのはいい、それはかまわない。約束は約束、きちんと守る。

もとよりピジョンはこの作業が嫌いじゃない。

そんなに手の込んだものはスキルが届かないにしろ喜ぶ人の顔を思い描いて料理をする時間は嫌いじゃないし、おいしく食べてくれれば手間も報われる。「ピジョンの手料理は優しい味ね」と母さんが褒めてくれれば作り甲斐があるというもの……単純においしいじゃない抽象的な感想が若干ひっかかるが。ちなみにピジョンの得意料理はサンドイッチとパンケーキだ。レパートリーには他にスクランブルエッグがある。

優しく美しい母と育ち盛りの弟が手料理を食べてくれるのは嬉しいが、その上にふんぞりかえって胡坐をかく厚かましさには立腹だ。

甘やかすから付け上がるんだろうか？　過保護はコイツのためにもよくない、ビシッときめなきゃ……

椅子を蹴立ててもそもそやってくる気配、回り込む足音。テーブル上に雑誌を投げたスワローが、料理ができるまでの退屈しのぎにちょっかいをかけてくる。うろつかれると非常に目障りで気が散る。

兄の隙をついてつまみぐいを働こうとする手をひっぱたき、性懲りなく脇から忍ぶ手を肘で払いつつキッチンナイフを寝かせて具を盛り付けていく。

スワローが背後に立ち、無防備なうなじに吐息を吹きかけてくる。

「ひ」

そこ弱いの知ってるくせに……さらには耳に息をかけ、なれなれしく腰に手を回して密着。

ピジョンの手元を無遠慮に覗き込んで偉そうに指図する。

「ちんたらやってんなよ。あ、自分のだけ厚く塗りやがって」

「いちゃもんつけるなよ、みんな平等だって」

「嘘つけ」

「……なんでバレたのさ怖い、パッと見わからないくらい微妙に盛ったのに。連続で当番を代わってやったんだ、コンビーフのペーストをほんのちょっと厚くする程度の役得は大目に見ろよ」
目と勘の鋭いスワローに隠し事はできない。コイツの反応速度は異常だ、日々の模擬戦で骨の髄まで叩きこまれている。言い忘れたがピジョンが当番の代行をそこまで渋らない理由には、自分のサンドイッチにちょっぴりおまけできるからというのもある。あくまでバレない程度のズルを心がけているがスワローの目はごまかせなかった。
兄の攻撃が的外れなのをいいことにスワローは後ろ髪をもてあそび、図々しく肩に顎をのっけてくる。
とても邪魔くさい。のみならず肩越しに手を伸ばしてしつこくサンドイッチを付け狙うので、ピジョンの声もつい尖ってしまう。
「くっつくな、邪魔」
「腹減ったんだよ、ガマンできねぇ」
「しょうがないな……一口だけだぞ」
スワローがあーんと大口開ける。ピジョンは弟の口にサンドイッチを運ぶ。スワローはそれにかぶりつき咀嚼と嚥下、こりずにまた口を開ける。まるで燕の雛の餌付けだ。
「一口だけって約束したろ」
「生殺しは酷だぜ。可愛い弟が飢え死にしてもいいのかよ」
「少し元気じゃなくなってくれると有り難いね」
コイツは言い出したらてんで聞かない、追い払うにはとっとと要求をのむべきだ。塩っぽい口調とは裏腹に、コンビーフのサンドイッチを甲斐甲斐しく口元へ運んでやる。スワローは首を伸ばして齧り、一気に半分食べてしまう。特訓の後で腹が減っているというのは本当だろう。ちょっと可哀想になったが、それはピジョンだっておなじだ。
「もういいだろあっちいけって、今手が放せないんだ」
「もう一口」
「これ食べたらいい子で待ってろ」
ピジョンは昔からおねだりに弱い。請われると自分のぶんまで分け与えてしまうから栄養が足りず背が伸びないのだろうか？　求めに応じやすい性分を何とかしなければ……
「指にマスタードついてる」
「え？」
物思いを断ち切ったのはスワローのそっけない声。おもむろに兄の手を掴み、親指を口に含む。
「っ……」
唇が吸い付く感触がくすぐったく、舌でねぶられると妙な心地だ。なんというか、肌がざわざわする。
ピジョンは唇を噛んで熱く湿った吐息を殺し、自分の指を

とらえて伏し目でねぶる弟の、睫毛の影さえメランコリックな色っぽい表情を観察する。
軽い甘噛みをまじえ強弱自在に吸い上げ、はたして本当にマスタードが付着していたか定かではない指をたっぷり舐め転がし、ようやく満足して離す。弟の唾液に塗れた親指をシャツに擦り付け、睨む。
「ありがとうは？」
「……舐め方が無駄にいやらしい」
「おかわりは？」
「やらないよ」
礼の代わりに照れ隠しの不満を吐露、キッチンナイフをおく。
「おまたせ。できたよ」
皿に同じ数だけ盛ったサンドイッチを荒っぽくテーブルにだす。椅子を引いてスワローの対面に着席、兄弟向かい合って昼食をとる……前に、手を組んでお祈りする。
「イエスさま、たくさんのごちそうをありがとうございます。おおきくなるため、なんでもたべます。たべるもののないひとびともたすけてください。いただきます」
ピジョンは瞠目し、神妙にうなだれて聖句を唱える。キリスト教で定められた食前の祈りは全部で3バージョンあり、これは子供向けの一番易しいものだ。
日々の糧を得られることに感謝し、恵み深き主を言祝ぐ兄を、向かいのスワローは吐きそうな顔で見詰めている。
「いい加減それよせ、メシがまずくなる」
「なんでさ、子供の頃からやってるだろ？　毎日ご飯を食べられるだけで幸せなんだ、糧を恵んでくれる神様に感謝するのは正しい行いだって母さんにもそう教えてもらったじゃないか。お前はサボってるけど」
「やってられっかンな茶番。イマドキだれもしねえよ」
「今にバチがあたるよ」
「おもしれぇ、あててみやがれ」
椅子にふんぞりかえって威張るスワローにピジョンは処置なしと首を振る。スワローに言わせれば母の教えを律義に守り、16になった今でも食前の祈りを欠かさない兄の信心深さの方が異常だ。いや、信心深いとは違うか……底抜けに真面目なのだ。
でもまあここだけの話、目を瞑って馬鹿正直に祈る兄を真っ正面から観察する時間はなかなかどうして悪くない。
美形ともてはやされる母や弟と比べたらどうしても霞んでしまうが、地味に整った面差しに純粋培養の信仰心の上澄みが表れて、生来の善良さとか誠実さとか、スワローがはなから授かってない美徳がほのめく瞬間を特等席から見届けるのは弟の特権だ。

目を開けてさあ食事にとりかかろうとしたピジョンが眉根を寄せる。
「……サンドイッチがない」
「気のせいだろ」
「お前の皿に移動してる」
「気のせいだって」
「一個減ってるじゃないか油断も隙もない、ホントその手癖の悪さどうにかしろよ！」
チッ、バレた。スワローの皿からサンドイッチを取り返したピジョンはお冠だ。昼飯くらい心安らかにとりたい。しばらくサンドイッチをぱくつくのに夢中になる。
ピジョンの食事はうまくもまずくもない、可も不可もないギリギリ及第点だが食べられないことはないのでまあいい。咀嚼音が響く中、サンドイッチをあらかたたいらげたスワローが腹をさすって切り出す。
「で？　例の件どうするよ、いつ母さんに言うんだ」
「ぐ」
サンドイッチのかたまりが喉に詰まる。胸を叩いて嚥下してコップの水を飲み干し、言い訳っぽく呟く。
「……ちゃんと考えてる。こーゆーのはタイミングが大事なんだ」
「昨日も一昨日もその前もその前も言ってたろ、いい加減耳タコだ」
「よく覚えてるね。記憶力いいんだ」
「テメェの都合悪いことに関しちゃピカイチだ。まさかびびってんじゃねーだろな？」
「びびってないさ、ただなんていうか……ほら、大事なことだし。母さんは大抵昼過ぎまで寝てるし、起こしちゃ悪いし……切り出すきっかけが掴めなくて。変に驚かせたくない」
「はっきりしろよ、ぐだぐだ先延ばしたって気まずいのは一緒だぜ」
「お前に言われなくてもわかってるさ」
「俺達もいいトシだ、いずれはこっから出てくんだ。それがちょっと早まるだけの話だろ？　母さんだって三十路前の女ざかり、コブが消えた方が男遊びに精が出てせいせいするさ」
片手をひらひらさせざっくばらんに言いきるスワローに対し、ピジョンは煮え切らない態度で俯き、卓上に散らばったパンくずを一粒一粒人さし指で潰して拾っていく。
「そりゃそうだけど……賞金稼ぎになるなんて寝耳に水ですんなりＯＫもらえるはずない、危険な仕事だし絶対いやがるよ。反対されたらどうするの？　行かないでって泣かれたら？　勝手に出てって母さんを哀しませるのはいやだ」

指にくっついたパンくずをもそもそついばんでピジョンが渋る。どんだけ意地汚いんだコイツ。
「マザコン野郎が。口を開けば母さん母さん、変わった鳴き声の駄バトだな」
「お前にだけは言われたくない」
三年前のあの日、兄弟は賞金稼ぎになると約束した。
いずれは母と暮らすトレーラーハウスを出て自活すると取り決めて、その為にコツコツ貯金を積んだ。現在ピジョンは16、スワローは14。世間のならいに照らせば立派に独り立ちできる年齢だ、ようやく巣立ちの季節が訪れたのだ。
スワローは卓上にずいと身を乗り出し、兄の胸ぐらに掴みかからんばかりの剣幕で息巻く。
「貯金もようやっと目標額に達したんだ、言うなら今だろ？」
「俺とお前ふたり合わせてね」
「なんだよ不満か？」
「弟がポン引きまがいのまねしていい顔するわけないじゃないか」
「儲かるんだからいいんだろ。どっかの駄バトみてェに靴磨き車の修理、アクセ売りでシコシコ稼ぐよかよっぽどマシだ。それにポン引きじゃねーよ、風俗店の用心棒だよ。女に付き纏う勘違い男を彼氏のフリして追っ払うのも仕事のうちだ」
それと売春。ピジョンが怒ると鬱陶しいので黙っているがこれが最大の収入源だ。
三年前からこっち男や女と手あたりかまわず関係をもって、今ではテクニックも達者になった。14歳になって美しさに磨きがかかったスワローを抱きたがる男や抱かれたがる女は腐るほどいて、ただ街角に突っ立ってるだけで引きも切らない。まったく楽な商売だぜとスワローは自嘲する。
ハードなプレイを請け負えばそれだけ儲かるのも旨みだ。
「それジゴロとかヒモっていわない？」
ピジョンが疑わしげなジト目を向けてくる。弟の素行が全面的に信用できないらしい。慧眼だ。
「たんまり弾んでくれんだからいいだろ別に」
「女心をもてあそんで、人としてどうかと思うよ」
「またピュアいこと言ってやがる……そろそろ童貞卒業しろよ、キャサリンのケツでも借りてさ」
「〜っ、最低だな！　キャサリンをそんな汚れた目で見たこと一度もないぞ！」
「はっ相変わらずすーぐむきになる、そんなにご執心かよ朝になると決まってヒス起こすあのうるせえのにさ！　いい加減捨てっちまえよ、目障り耳障りでかなわねぇ」
「血も涙も人の心もないな……行くあてないのに放り出したら可哀想じゃないか、あの子がきてくれてどんなに助かっ

たか……献立のレパートリーも増えたし」
「あーそうかよそうですか、だったらキャサリンを抱いて寝ろ」
「言われなくてもそうする。だっこするとほっこりあったかいんだ、どっかのだれかみたいに悪さしてこないしね」
「ぐずぐずしてっと食っちまうぞ」
「キャサリンをいじめたらいくらお前だって許さないぞ、あの子は俺達の妹みたいなもんだ、もうちょっと優しくしろ」
ほぼ一年前に家族に加わった新しい同居人を一生懸命庇い立てるビジョンにいらだち、スワローは悪ぶって暴言を吐く。
「さては怖いんだな、母さんに忘れられちまうのが」
図星を突かれたじろぐ。椅子を蹴立ててテーブルを叩き、押し黙る兄へ語気強く迫る。
「どーせテメェのこった、俺達がいなくても母さんがちゃんとやってけるか、一人で服着れっかメシ食えっかなんておためごかしだ。ぶっちゃけちまえよビジョン、このマザコン野郎。親離れできねーのはお前の方だ、ここを出るのが寂しいんだろ。まだ母さんのおっぱい恋しさにだだこねる気か？」
「マ、マザコンじゃない。ただ……俺達がいなくても一人でやってけるか心配なだけさ。ブラのホックだって留められないんだよあの人」
「母さんの面倒は新しい男が見てくれるさ。いっそ俺達がいねーほうが羽伸ばせるってなもんだ、トレーラーハウスも広々使えるし喘ぎ声も気にしねーですむ」
もごもご弁解するビジョンの煮え切らなさにじれて、スワローはテーブルに申し分なく長い両脚を放りだす。
「いっそ母さんの前で灯油被って火だるまになれよ、衝撃的な死に様さらしゃインパクト勝ちで末永く覚えてもらえるぜ」
「それバーナードさんのこと？　あの人は生きてるよ。大怪我したけど」
「死に損なったんだろ？　女にフラれたショックで焼身自殺とか大分キてるぜ、コレがホントの傷心自殺ってか？　けっ、笑い話にもなりゃしねえ」
バーナードは数年前に訪れた村で出会った男だ。
甘やかされて育った裕福な牧場主の三男坊で、すっかり母にのぼせ上がって結構な額を貢いでくれたが、村を去る時に一悶着あった。いやだ行くな捨てたら死ぬ死んでやると涙ながらに脅迫し、あなたのことは大好きよ良くしてくれて感謝してるでも行くわねさようならと説き伏せる母の目の前で、灯油缶の中身をかぶって自分に火を付けたのだ。

結果火だるまになって大やけどを負ったが、幸いにして一命はとりとめた。
「とち狂ったマネしくさったキチガイのせいで、母さんは魔女狩りにあったんだ」
「村中の男と関係する母さんもどうかと思うけど」
「手だけ口だけもいんだろ」
「そういう問題かなあ……」
「岡惚れしたヤツの面倒まで見きれねーよ。間一髪アクセルふかして追ン出てきたが、石があたって車にキズ付くわ最低だ。商売女に本気になるなよ、お芝居と本音の区別も付かねーのか？」
「あの村には二度と行けないね……火だるまになってゴロゴロ転がってるとこ、いまでも夢に見るよ。命が助かってよかったけど……叩いて消した毛布はこげちゃった」
「死ぬんなら勝手に死ね」
「お前は冷たい」
自分に迷惑かけた他人までいちいち思いやる優しさを勘違いした兄の非難をスワローはおもいっきり笑い飛ばし、彼一流のふてぶてしさで傲慢に開き直る。
「死にたくて死んだヤツに同情するのは失礼だろ？」
「バーナードさんは生きてるよ……多分」
「死にてぇヤツは勝手に死ね、死んだらとっとと忘れ去るだけだ。いちいち蒸し返して慰めてやるほど生きてるヤツは暇じゃねーんだ、ライフ・イズ・マネー、人生金なり」
乱れた金髪がかかる赤錆の目は冷めきって、人生に敗北した自殺者への軽蔑の念も露わだ。
スワローの死生観はひどくドライだ。男女かまわずセックスをしまくってドラッグのような刹那的な快楽を享受しても根本的な所で他人を信頼する事がなく、けっして他者に心を開かない。
ごく一部の特別な例外を除いては。
「忘れてほしくなきゃ死ねって言ったくせに、矛盾してる」
「死んだヤツがそいつにとって大事なら覚えてンだろって話だ。それ以外はお生憎さま無駄死にだ」
「そんなに言うならお前がやれよ、賞金稼ぎになりたいからここを出てくって母さんに」
「やなこった、そりゃ兄貴の役目だろ？　せっかく顔を立ててやってんだ、根性だせよ」
「ずるいぞ、こんな時ばっかり持ち上げて……言いたくないのは俺だって同じだ、逃げるなよ」
「誰が逃げるって？　そりゃテメェだろーが！　どのみち避けて通れねーイベントだ腹くくってガツンと一発決めてこい、もうアンタのパンツ洗わされんのはこりごりだってな」

「ねえ、ホントに今いくの？　もう一年や二年延ばしてもいいんじゃないか、母さんをおいてくのはやっぱり心配……」
轟音を伴う衝撃にテーブルが揺れる。スワローがナイフの尻を下にして真ん中に立てたのだ。
「コイツで決めようぜ」
「……どういうこと？」
「お前のほうに倒れたらお前が、俺のほうに倒れたら俺がパシる。泣いても笑ってもやり直しはきかねェ、お情け無用の一発勝負だ」
「レオナルドのいうとおりか……」
「ナイフのご指名なら文句ねェだろ？　神様とやらの意にもかなってる」
まだ渋る兄にごり押し、ナイフの柄を握ったまま挑発的にほくそえんで出方をうかがうスワローに、ピジョンは意を決して頷く。損な役割を押し付け合っても埒が明かない、ナイフの切っ先が示す方向に運命を託すのは良案に思えた。
「……のった」
「そうこなくっちゃ」
兄の同意を得たスワローは不敵な笑みを深め、軽く唇をなめてナイフからゆっくりと手を離す。
固唾を呑んで見守るピジョンと眼光に圧をかけ見下すスワローをよそに、支えを失ったナイフが前後に傾いで倒れていく―

「おいでキャサリン。だっこしたげる」
「コケコーッ!!」
ケージの扉を開けて、中でうるさく騒ぐキャサリンを差し招く。
あんまり暴れると母さんや弟が起きてしまうので、唇の前で「しー」と指を立てる。元気よく羽ばたいてモッズコートの懐にダイブしたキャサリンを受け止め、隅っこに移動する。
キャサリンは凶悪な目をした鶏だ。ほぼ一年前、どこからか脱走してさまよっていたところをピジョンが保護した。飼い主が誰かわからずどこへ帰したらいいかもわからないので、以来ピジョンが責任をもって世話している。
母は動物を飼うのに反対しない。
ピジョンが捨て猫や捨て犬を拾ってくるのはこれが初めてじゃない、子供の頃から行く先々で衰弱した犬猫を拾ってきては「あらあらまあまあ」と母に微笑まれ「またかよ」とスワローにどやされていた。
だってほっとけないんだもん、しかたないじゃないか。
ほっといたら死んでしまうのがわかりきっていて薄情なことはできない。

さすがに鶏を拾ってきたのにはびっくりしていたけど、今ではすっかり家族の一員だ。毎朝卵を提供してくれるので、料理のレパートリーにスクランブルエッグが追加された。現代において卵は貴重品だ。家畜はわかりやすい財産の目録で、鶏や豚、牛馬を多く所有しているほど有力者として地方で権勢を誇る。

「お前が来てくれてホント大助かりだ、毎朝新鮮な卵に預かれるし……だっこすればあったかいし」

「コケー」

「ふふ。くすぐったい」

キャサリンの羽毛に顔を埋め、モッズコートごと包んで懐をぬくめる。

キャサリンは人慣れしてない気難しい性格の雌だ。大人しく抱かせてくれるようになったのは最近で、それ以前はケージに指を入れようものなら一面に羽毛を撒き散らしヒステリックに暴れ狂った。懐くのに時間がかかったぶん愛着は強い。辛抱強く餌をやり水を替え、「おはよう」「おやすみ」「元気？」とまめに声をかけ続けた努力が報われた感慨はひとしおだ。単に鶏しか話し相手がいないピジョンを憐れんだのかもしれないが……

孤独なピジョンにとってキャサリンは可愛い妹分であり、母や弟に言えない事も話せるかけがえのない親友だ。

ピジョンはもふもふに肥えたキャサリンを抱きしめて、今日の出来事を回想する。

「ずるいぞ、反則だ！」

声を荒げて憤る兄に対し、テーブルを蹴って傾かせたスワローはいけしゃあしゃあとぬかす。

「はァ？　何が？　手や足を出しちゃだめなんてルール最初からねえぞ」

「テーブルを足で傾けてこっちに倒したじゃないか！」

「勝負は勝負、決着は付いたろーが。異論は聞かねーぜ、腹を括って行ってこい」

「この……減らず口ばかりの屁理屈野郎！」

「知ってる？　世の中にフェアなもんなんてねーの、俺は世界のルールにならっただけさ」

耳の穴をほじって促すスワローをなじっても後の祭りだ、ナイフはピジョンの方をさして倒れている。アンフェアに抗議したところで結果は覆せない。

「健闘（グッドラック）を祈る」

ナイフをもてあそぶスワローにけしかけられ、不承不承母へ直談判にいく。

取り置きしておいた母の分のサンドイッチを盛った皿に、戸棚の奥のシートから切り取った錠剤とコップ一杯の水を

添え、全部を盆にのせて運んでいく。
トレーラーハウスの中はごちゃごちゃしている。脱ぎ捨てられた服や雑誌が混沌と散らかり放題、まさしく足の踏み場もない。
客が来るときはもう少し綺麗にしているのだが、今日はその予定もないので怠惰を極めたていたらく。綺麗好きなピジョンがいくら掃除と整頓を頑張っても、自堕落な性分の弟と母がすぐ散らかすので追い付かない現状がもどかしい。トレーラーハウスの中間にカーテンレールがあり、それが思春期の兄弟と、仕事場を兼ねる母の部屋を簡単に仕切っている。ピジョンは崩れかけた雑誌の山を踏み越え、洗濯してないシャツやズボンや下着を迂回する。
「入るよ、母さん」
「うぅ〜？」
一応断ってからカーテンを開く。母はこちらに背を向けてベッドに寝ていた。毛布がこんもりと人型に盛り上がっている。娼婦の稼ぎ時は日が沈んでからだ。仕事が仕事なため朝は遅く、昼過ぎまで惰眠を貪っている。低血圧なのが関係してるのかもしれないけど……サイドテーブルに盆を置くピジョンの傍らで、母がむくりと起き上がる。
「ふわぁ……もうこんな時間？　寝すぎちゃった」
「昨日も遅かったから仕方ないよ」
ふやけきったあくびをし、子どもっぽく目を擦る母をフォローする。少女趣味なフリルをあしらった純白のネグリジェが寝起きのあどけない顔によく似合うが実年齢は三十路すぎだ。よく見ると目尻に小皺がある。兄弟どちらとも似てない光沢ある金髪は、しっとり艶めく亜麻色と表現したほうがしっくりくる。
波打ち流れる髪の間からのろくさ手を伸ばし、もそもそとサンドイッチを摘まむ。
「いただきます……コンビーフ？」
「スワローのリクエストでね」
「ピジョンの味がする？……真心テイストだわ……あっいっけない、お祈り忘れてた」
寝ぼけまなこで呟き、サンドイッチを頬張りながらむにゃむにゃと十字を切る。
「イエスさま、たくさんのごちそうをありがとう。たべるもののないひとたちもたすけてあげてね。以下略」
「毎度あっさり風味だね」
「だって長いんだもの。ママいま食べるのに忙しくて」
もう三十路すぎなのにいつまでも夢見る少女のような母さん。あぶなっかしくてほっとけない母さん。この人をひとりにして本当に大丈夫だろうか？　おいていってもいいのだろうか。一人じゃブラのホックも留められないのに？

見た目も味も破壊的な料理しか作れないのに？
毛布にもぐったまま、息子の手作りサンドイッチをしあわせそうにぱくつく母に注意する。
「寝ながら食べると喉に詰まるよ」
「だいじょーぶ、ママは食っちゃ寝のプロだもの」
「いばることじゃないよ……ベッドも汚れるし」
「ピジョンは心配性ね、これくらい払えばへーきへーき。いざとなればキャサリンが食べてくれるし」
「キャサリンは残飯処理係じゃないでしょ」
「じゃあピジョン食べる？」
「食べないよ！　息子を鶏と同列に扱わないで！」
「怒っちゃいやよ、私のかわいい小鳩ちゃん。ほんの冗談じゃない」
どこまでも楽観的な様子で無邪気に笑う。本題を切りだすタイミングをはかりあぐね、苦悩を深める息子の内心に気付きもせず、年若い母は自堕落に寝転がって食事をとっている。
塩辛いだけのコンビーフサンドを口に運んで咀嚼と嚥下をくりかえす母を前にぐっと拳を握り込み、挑むよう顔を上げる。
「あのさ母さん」
「なあに？」
母が顔も上げず聞く。ピジョンは視線を揺らし、まずは小手調べの一球を投げる。
「俺、今年で16だよね」
「うん」
「スワローはもう14。もう立派な大人……は言い過ぎだけど、十分に大きくなった」
「そうね……もうそんなになるのね」
母が頷いて遠い目をする。息子たちに等しく遺伝した赤茶の瞳が感傷に潤み、成熟した横顔が聖母のような慈愛を宿す。母がどこを見ているかピジョンはわからない。自分が知らない、母が決して話したがらない過去の方向だろうか。
次の瞬間、予想外の出来事が起きる。
「うわっ!?」
母がおもむろに腕をさしのべピジョンをぎゅっと抱きしめたのだ。
「か、母さん……突然どうしたのさ、重いよ」
「ううーん、なんかじーんときちゃって。ふたりともいつのまにかこんなに大きくなったのね、オムツでよちよち歩きしてたのがあっというまね」
うろたえたじろぐピジョンに頬ずり、首の後ろに腕を回してかき抱く。まるで恋人に甘えるような抱擁。押し付けられた豊満な胸が柔く潰れどぎまぎする。母にハグされるの

は初めてじゃない、子供の頃から日常的に何万回とくりかえされてきた事だ。母はハグが大好きだ。挨拶代わりに息子たちに抱き付いてはピジョンに恥ずかしがられスワローに鬱陶しがられてきた。けれど今この時ばかりは、前振りのせいもあって特別な意味合いを感じてしまう。母がずり落ちないよう咄嗟に支え、不器用に背中をさする。

「いつの話してるの……俺はもう赤ん坊じゃないよ」

「そうね、そうよね。ピジョンはすっかり立派なお兄ちゃんだわ、こんな素敵な息子をもって果報者よ。早起きが苦手な私の分まで家事を手伝ってくれるし、ベッドにまで食事を運んでくれるし……」

「それが仕事だもの、母さんは俺達を育てる為に身を削ってがんばってるんだから……料理したり洗濯物干すくらい当たり前さ」

そうだ、母は頑張ってる。十代半ばでピジョンを産んでから、女手ひとつでずっと頑張ってきたのだ。

ピジョンは母の苦労を一番近くで見てきて身につまされている。ある時は乱暴な客に髪を掴んで引きずられ、ある時は顔を殴られて痣を作り、それでも体を売り続けたのは育ち盛りの息子たちを養うためだ。

「本当にいい子ね。大好きよ」

「大袈裟だよ……」

甘ったるく囁いて息子の頭をなでる。ピジョンはこれに弱い。これをされると強く出れない。16にもなって母親によしよしされ面映ゆい反面、こみ上げる幸せを噛み殺しきれず、自然と頬がゆるんでしまう。視界の端でカーテンが怪しく揺れる。スワローのヤツ、聞き耳立ててるな？

盗み聞きする弟の気配に咳払い。ぬるい空気に流されかけた自制心を引き締め直し、心を鬼にしてしなだれかかる母をひっぺがす。

「母さんはさ、俺達が突然いなくなったらどうする？」

「え……？」

息子にふりほどかれ愕然とする母。見開かれた目が困惑に揺れ、次いで絶望に染まっていく。親に捨てられた幼い女の子のようなその顔……痛々しいほどのあどけなさを剥きだした、まだ三十を少しでたばかりの女性の顔。

言葉足らずを反省し、人さし指と親指で三角を作ってしどろもどろ付け加える。

「えっと、たとえばだよ？　俺とスワローがある日このトレーラーハウスを出て、母さんが一人になったら……もしもの話だからね？　別に母さんを捨てるとか見放すとかじゃないからそこはしっかり安心して、でもほら、俺達がいないほうが広く使えるし、のびのび快適だし……お客さんだって喜ぶし。母さんにとったらいいこと尽くしじゃないかっ

て最近よく考えるんだ」
半分以上スワローの受け売り、弟から借りた言葉だ。あたふたと取り乱し、しょっぱい言い訳を重ねるピジョンを母はなんともいえぬ悲哀の表情で凝視していたが、やがて華奢な腕が再び伸びてくる。
避けられない。避けようという気すらおきなかった。
「いいのよ心配しないで」
「……っ」
「ピジョンとスワローは私がお腹を痛めて産んだ子よ、変な遠慮なんかしないで頂戴、ここはあなたたちの家なんだから。これまでもこれからもずっと……変わらない居場所よ。望むならずっとここにいていいの」
母の腕は甘い枷だ、抱擁されると反抗の気力が根こそぎ削がれる。カーテンの向こうで見張るスワローの気配にも増して乳飲み子の頃から馴染んだぬくもりには抗いがたい。
息子の繊細な前髪をかきあげ額にやさしくキスをする。
「……」
拒もうと手を上げ、自分の首に巻き付く肘にかけ、それをまた力なくおろす。
無力感を握り潰してもう一度掲げた手で母の背を軽く叩き、息子の務めとしてハグを返す。自分に望まれた役割、求められた役柄を忠実にこなす。
喉元まで出かけた言葉がむなしく霧散、ぬるい諦念に浸って目を閉じる。
ずるいよ、母さん。
こんなことされたんじゃ、話せない。
母の事は愛してる。だからこそ本当のことは言えない、がっかりさせたくない、幻滅させたくない。
手塩にかけて育て上げた息子たちが突然出ていくと告げたらショックを受けるに決まってる、母を哀しませることなどピジョンもスワローもこれっぽっちも望んでない。
「だいじょうぶだよ母さん、どこにもいかないよ」
「……ホント？」
「うん」
「あーびっくり心臓止まるかと思っちゃった！　もーピジョンてば脅かすのはよしてちょうだい、かわいい息子が手品の煙みたいに突然消えちゃったらママどうしたらいいかわかんないわ、頭からブスブス煙吹いて思考回路がショートしちゃう！」
大袈裟に胸をなでおろし安心する母にぎこちなく苦笑い、内側から胸を刺す罪悪感に耐える。
ごめんスワロー、ごめん母さん。
黙って見ている弟とだました母とに心の中で謝罪する。ピジョンは盆の上の錠剤をさして呟く。

「ピルここにおいてくね。食べ終わったらシンクにお皿だしといて」
「らじゃー！」
元気よく返事する母に背を向け、逃げるようにその場を去る。カーテンを捲り、しょげかえって出戻ったピジョンを不機嫌に腕を組んだスワローが待ち受ける。
「……んなこったろーと思った」
「……ごめん」
一発殴られる覚悟はしていた。また信頼を裏切ったのだ。恥ずかしくて後ろめたくてスワローの顔が見れない、どうあがいたってまっすぐ目を見る勇気がない、今すぐ消え入りたい衝動に駆られて靴紐がほどけかけたスニーカーと睨めっこする。
黙って立ち尽くす兄にスワローが不気味な静けさをまとって詰め寄る。
「母さんと俺、どっちが大事なの？」
スニーカーの先端を軽く踏まれる。靴紐が汚れて捩れる。もう泣きたい。でもスワローは許してくれない。吐息のかかる至近距離で手厳しく追及され、ピジョンは深々とうなだれるしかない。
「そんな聞き方ずるい……選べるわけないじゃないか」
母も弟もどっちも大事、ピジョンにとって大事な家族だ。究極の二者択一すぎて答えが出せない。
「腰抜け」
「！　ッぐぅ、」
「お前にゃがっかりだ」
靴裏に体重がかかる。スワローがあらん限りの憎しみを込めてピジョンの足をぐりぐり踏みにじり、憤然たる大股でトレーラーハウスの出口へ赴く。片足を抱えて悶絶しながら弟の背中に追い縋るピジョン。
「どこ行くんだよ！」
「知ったことか。テメェにゃ関係ねえ」
「いつ帰るの？」
「テメェが童貞捨てた頃」
「～っ、勝手にしろ！」
「あーあー勝手にするさ、せいぜいぱーっと気晴らしにいってくるさ！　これ以上テメェのような煮え切らねーヘタレとツラ突き合わせてたらムカムカしすぎてどうになっちまうぜ！」
見損なったぜ兄貴と、冷たく突き放す背中がそう言っていた。足音荒く出ていくスワローがどんな表情を浮かべていたか、とうとう確かめられずじまいだった。

回想終了。

「……というわけなんだ。キャサリンはどっちが悪いと思う？　俺が悪いのかな」
コケーとキャサリンが鳴く。
「……だよね。悪くないよね。悪いのはアイツだよね。最初にズルしたのアイツだし、俺ははじめからやだったんだ。俺達ふたりが決めたことなんだから一緒に言うならまだわかる。なんで俺にばっかやなこと押し付けるのさ……酷いよ、あんまりだ、理不尽だ、こんなのってない」
丸く膨らんだキャサリンを抱きしめて愚痴る。
キャサリンはコケコケと相槌っぽいのを打ちながらピジョンの腕や胸をやたらめったら突付きまくる。
「……元気づけてくれた？」
「コケー」
「いい子だねお前は」
あちこち啄まれたコートを毛羽立たせ悄然と呟く。
「俺の味方はお前だけだよキャサリン……」
『知ってる？　鶏姦は癖になるんだぜ』
最悪のタイミングで甦ったスワローの揶揄に慌てて首を振る。キャサリンのケージは荷台にある。トレーラーハウスの前部が母の仕事場兼私室、後部が兄弟共有のスペースで、さらに最後部にあたる荷台はカーテンで仕切られている。キャサリンを抱いて蹲るピジョンからは、カーテンに阻まれてベッドが見えない。
「……もう寝たかな……」
スワローと顔を合わせる気まずさから荷台に逃げ、キャサリンを抱いて蹲っていたが、それももう限界だ。
この頃ピジョンは夜になるときまって荷台にこもる。キャサリンに餌をやる、ケージを掃除するというのは単なる口実で、本音はスワローと同じベッドで寝るのを極力避けたいからだ。
ピジョンが16歳になって数日が経過した。
「……なんだってできないこと言っちゃうかな、俺の馬鹿」
三年前に勢い交わしてしまった約束を思い出すにつけ、当時の自分を呪い殺したくなる。若気の至りですまされる過ちではない。
確かに言った。言いましたとも。当時はふたりともまだ子どもで生半可な知識しか持たず体もできあがりきってなかった。セックスは互いに負担をかける。ましてや兄弟同士の近親相姦なんて不道徳な行い、ピジョンの良心と常識に照らせば断固として容認しがたい。
その場しのぎの先延ばしの口約束……期限が満了したらその時にまた身の処し方を検討しようと、未来の自分にぶん投げて楽観していた。

16歳の誕生日をむかえてからピジョンはいつ弟にヤられるか、一分一秒たりとも気が抜けない綱渡りの日々を送っている。
スワローが少しでも大きな音をたてようものならびくりとし、何かの拍子に体が触れ合おうものなら「ひっ!?」と声が出る。意識しすぎだとわかっていても恐怖心から来る生理的な拒絶反応はいかんともしがたく、過敏なリアクションで応じてしまう悪循環だ。
さらに不気味なのは沈黙を守るスワローの態度だ。
「……アイツなんで何も言わないんだ。まさか忘れたのか?」
アイツの性格上俺が忘れたふりしてたらキレそうなものなのに、一切それには触れてこない。見て見ぬふりのしらんぷりだ。
こっちはいつ食われるかびくびくしてるのに……揃えた膝の上にちんまりおさまるキャサリンは、途方に暮れた飼い主を激しく突付きまくる。愛情表現が痛い。
「いたっいたいよやめてキャサリンいたいってば!」
「コケコーッ」
「もう……お前まで俺をいじめるの? 暴君はもう間に合ってるよ」
拾ってやった恩を仇で返されても強く出れないのがピジョンの長所にして短所だ。
荷台の手狭な暗がりに身を潜めていると母や弟の寝息まで闇を縫って伝ってきそうで、すぐ近くまで忍び寄る衣擦れの幻聴に悩まされる。いや……忘れてるならそれがいい、それが一番。弟と寝るなんてとんでもない、神の教えに背く行為だ。スワローは相変わらずちょっかいをかけてくるけど、ピジョンが泣いて嫌がれば最後まですることはないし、ギリギリ寸止めで勘弁してくれる。
なのにどうして不安なんだ? スワローがあの約束をすっかりド忘れしてるんだとしたら、仮にそうだとしたら……
「……俺に飽きたのかな」
俺の体に興味がなくなったのか?
ピジョンは哀しげに俯き、キャサリンを懐に抱きこんだまま自らの貧相な体をまさぐる。シャツの脇から手を入れて痩せた腹筋、ドッグタグが這う胸板をなでさすってがっくりと肩を落とす。成長著しいスワローとは対照的に背は殆ど伸びず筋肉も付きにくい体質ときては、将来性はほぼ見込めない。スワローと並んだら格段に見劣りする。アイツはモテまくりだし、わざわざ俺みたいなみすぼらしいのを構わなくても遊び相手には不自由してない。
アイツはもう俺なんかどうだっていいんじゃないか?
「……」
生唾を呑み、下腹を不器用にまさぐったていた手をズボン

の膨らみに添える。
三年前と比べ、体は日々成熟して大人になりつつある。
マスターベーションの頻度も増えた。プライバシーのない環境の為人目を盗んで自分を慰めるのも難儀するが、ペニスを夢中でしごくたびきまって思い浮かぶのはスワローの顔やアイツにされた事だ。
雑誌で目にした女性のヌードや初恋の子の顔、さらには下着姿の風俗嬢を一生懸命呼び出そうとしても、スワローの巧みな指遣いや意地悪な笑みに散らされて、夜毎ベッドの中で思い通りにされる残像が浸蝕してくるのだ。
「っ……、」
いやなのに、忘れたいのに、アイツのせいですっかりおかしくなってしまった。アブノーマルな快楽を仕込まれた体は夜になると疼いてたまらず、やり場のない熱を逃がすのに苦労する。膨れ上がる一方の浅ましい期待と増大する不安、その時がくるのを待ち焦がれているのか怯えているのか自分でもわからない。
アイツにさわってほしいだなんて。
「嘘だ……」
体が火照って仕方ないだなんて。
ここ数日間、ピジョンは夜毎荷台に逃げてくる。荷台にこもってすることといえばオナニーだ。
眠りに就いた母や弟の耳を気にしながら、カーテンを隔てたすぐそこの弟の気配に背徳的な興奮を味わいながら、声を噛み殺し自分を慰める虚しい行為をくりかえすのだ。
こんなことしたくないのに手が勝手に……気持ちよくなりたくて言うことを聞かない。
頭ではいけないとわかっている、抗う理性と反比例して火照りを持て余した体が疼く、タブーを犯す興奮が煽り立てられる。母さんごめんなさい俺は変態だと何十回も何百回も詫び小刻みに震える手でジッパーをじれったげにおろしていく。
スワローは発見した。性欲と暴力は代替がきく。故に性欲が溜まればだれかをこっぴどく殴って発散すればいい。
「ひでぶっ!!」
情けない悲鳴を上げて三段腹の巨漢が吹っ飛ぶ。
最前まで女の髪を掴んで引きずり回していた、縦幅も横幅もある醜男だ。強いものには下手にでて弱いものには強くでる典型的な腐れ外道。
相手がまだ十代前半の華奢な少年と侮り、威勢よく殴りかかった目論見はまんまと外れた。
歓楽街の路地裏、空き瓶を詰めた木箱の塔が轟音を奏でて盛大に崩落。

木箱の山へ背中から突っ込んだ男はひとたまりもなく戦意喪失、もんどりうって低く呻く。
スワローは大股ににじり寄り、その手の甲を踏み付ける。
「肋骨何本かイッたな。次は指の骨折ってく？」
「く、くそ……ガキの分際でしゃしゃりでやがって。テメェは関係ねーだろさ！」
「ところがどっこい大アリさ、この界隈に女に乱暴働く心得違いのアホがいるからキツイお灸を据えてやってくれって頼まれちまってさ」
しどけなく金髪が舞う赤錆の瞳が残忍に濡れ光る。
スワローの背後ではあられもなく服をはだけた娼婦が放心の態で蹲っている。
顔と体には大小の無惨な痣が咲き乱れ、暴行の痕跡が明らか。鼻血も出ている。
すっかり怯えきり、恐怖に引き攣った表情であとじさる女とへたりこんだ男とを見比べ、スワローは両足を開いてしゃがみこむ。
「アンタさ、女の首絞めながらやるのが好きなんだって？そっちのほうがアソコがよく締まるって、そう吹かしてるそうじゃねーか」
「ぐ……それのどこが悪い、金で買った女に何しようが俺の勝手だ」
「ソイツはちっとばかし思い上がりがすぎるってもんさ、商品にキズ付けられちゃたまんねーよ。娼婦は顔と体が商売道具なんだ、慰謝料たんまり弾んでもらわなきゃな」
男の顔には品性の卑しさが滲んでいる、まったく反吐がでるようなゲスなクズだ。コイツは界隈でも悪名高いゴロツキ崩れで、行きずりの娼婦を暴行するのが生き甲斐だった。別に珍しくもない、商売女を虐げて射精する加虐趣味の変態野郎。セックスを征服欲と優越感を満たす道具にし、服従と隷属だけを女に求め、相手の苦痛を搾取することでしか達せないひねこびた自尊心のかたまり。
生憎とその手の鬼畜は腐るほど見飽きており、扱いも熟知している。
スワローは手近に転がった酒瓶の底部を叩き割り、鋭利な切っ先を男の喉笛に突き付ける。
「うぐっ」
脅しには物を使うのが効果的だ。わざわざ愛用のナイフを出すまでもない、そこに転がってる酒瓶で事足りる。
精一杯仰け反る男の首の薄皮が裂け、赤い血が一線滲む。
眼光に威圧を宿し、興奮に乾いた唇を舐めて脅す。
「女の首を絞めなゃイケねー手合いなら遠慮はいらねーな？」
「た、頼む、見逃してくれ……ほんの出来心だったんだ」
「おーっと今度は見事な手のひら返しときたか。魔が差し

た、出来心で、性欲を抑えきれず？　お次はなんだ、言い訳は弾切れか？　せいぜい貧困な語彙（ボキャブラリー）をドブさらいして唄ってくれよ」
「金払った分了解してると思って、それで……俺だけじゃねェ、そっちだってさんざん愉しんだくせに」
「ふざけんな、人の喉潰しといて‼」
「よく言えるねそんなこと、泣いて嫌がる子をぶたなきゃイけないくそったれの変態野郎が‼」
暗がりから沸いてきた影の群れがスワローに加勢する。趨勢が決するまで固唾を呑んで傍観していた娼婦たちだ。仕事仲間を庇うよう円陣を組み、スワローを先頭に押し立て、男を一分の隙なく包囲する。憤怒と憎悪が綯い交ぜとなった醜悪な形相は、一様に男への極大の嫌悪感を表明していた。
スワローはおどけて肩を竦め、からかうよう両手を広げる。
「お嬢さんがたから大ブーイングだぜ？　顔面偏差値の差だな」
「くっ……うるせえ淫売が、大人しく股開くのがテメェらの仕事だろうが‼」
ああ、ぞくぞくする。
「反省の色がねェ。おいたができねーよう去勢するか」
だしぬけに腕を振り抜く。「ひっ！」と男が喉を窄め、咄嗟に足を引っ込める。
鋭く尖った破片が、切っ先にネオンの瞬きを宿して一面に飛び散る。
委縮した股間スレスレを掠めて酒瓶を叩き割れば、男の尻の下に湯気だつ水たまりが広がっていく。恐怖の絶頂で失禁したのだ。
「あはははは漏らしてやがんの、きったなーい！　すっかり股ぐら竦んじまったね、使い物になりゃしない！」
「いくらもらってもスカトロはお断りだね、他あたんな！」
「これに懲りたら二度と女の子に手ェ出すんじゃないよ、お呼びじゃないんだよアンタみたいな図体とイチモツのデカさが釣り合ってない短小は！」
形勢逆転した娼婦たちが一斉に笑いのめし下品な野次をとばす。悪意さざめく爆笑の渦の中、下着とズボンを濡らした男はもうぐうのねもでず、恥辱と激痛に丸まって震えるのみ。恥をかかされて顔も上げられない。
男の懐へ手をさしいれ、くたびれた財布をひったくり、皺くちゃの紙幣をまとめてすっぱ抜く。
そのうち数枚をスタジャンに無造作にねじこみ、残りを頭上高くまきちらす。
「さーて早いもん勝ち、おまちかねの慰謝料とりっぱぐれんな」

ネオンの光を塗されカラフルに踊る紙幣に蓮っ葉な嬌声を上げ女たちが群がる。軽薄に舞う札束を押し合いへし合い奪い合い、我欲を剥きだして醜く小競り合う金の亡者の中に鼻血を出した女がちゃっかりまじってるあたり立ち直りが早い。なんとも俗悪で痛快な光景だ。

空っぽの財布を男の顔面に投げ付け、スワローは年嵩の女に声を投げる。

「一丁あがり。あとは煮るなり焼くなりお好きにどーぞ」

「助かったよ、ありがとね」

この界隈では顔利きの四十路がらみの娼婦が礼を述べ、胸繰りの深いドレスの谷間から皺くちゃの紙幣をとりだしスワローに握らせる。

今晩の用心棒代プラス男の財布の中身……合わせてまあまあの実入りだ。少しは貯金の足しになる。

唾で湿した指で紙幣を弾いて数えるスワローに、女は愚痴っぽくかきくどく。

「コイツにゃみんな困ってたんだ。アタシらみたいな一流店のお抱えじゃない場末の娼婦は、トラブルが起きても泣き寝入りっきゃないし……それに付け込んで好き勝手悪さ働かれちゃたまんないよ。怪我した子はむこうで手当てしてやんな」

「スワローにはホント感謝してるの、頼りになるし」

「用心棒も安く引き受けてくれるしね」

「アタシたちの元締めはとんだケチんぼで、上納金の取り立てばかしキツくって、仲間が乱暴されても見て見ぬふりさ。変態客ほど口止め料込みでたんまりふんだくれるから大歓迎だって……イカレてるよ、股開いて相手する身にもなれってんだ」

路地に屯う年齢も肌の色もばらばらの娼婦たちの愚痴をスワローはどうでもよさそうに聞き流す。

「この街もひと昔前はもうちょい客の質がよかったんだけどね」

「やだよ姐さん、昔懐かしむのは年寄りの証拠だよ。そんなトシじゃないでしょうに」

互いの肩を叩いて馴れ合う四十路の娼婦とその妹分。

四十路女は娼婦たちを仕切る界隈のベテランで、てんで頼りにならない元締めに成り代わってなにくれと女の子たちの世話を焼いている。

「採石場が閉鎖になってから客足もすっかり引いてね……もともとは炭鉱街として栄えた街なんだけど、いい鉱石もでるんだよ」

「スワローはあそこに寝泊まりしてるんだっけ？　危ないから気を付けなよ」

「危ねえってなにが。落盤事故？」

「それもあるけど……ねえ？」
娼婦たちが意味深に目で示し合わせる。気に食わない符丁だ。スワローは口角を不敵に釣り上げる。
「幽霊でもでんの？」
「あそこはコヨーテ（コヨーテアグリー）の谷なのさ」
訳知り顔の四十路女が声を潜め、スワローへと耳打ちする。
「採石場の近くにコヨーテの群れが巣食ってるんだよ。まだ現役の頃に何人か喰い殺されてね……すっかり人の味を覚えて襲撃をくりかえすもんだから、それが閉鎖に繋がったのさ」
「へえ……そういや遠吠え聞いたな。狼かと思ったが」
「姿は見かけない？　最近は随分と大人しいね」
「駆逐されちゃったとかあ？」
「どっかよそに行ったのかね。谷の由来にまで見捨てられるとはこの土地も落ちぶれたもんさ」
「最近物騒だもんね、一か月前も気味悪い事件があったじゃん」
「ああ、ヒースタウンの住民が殺し合ったっての？　動機もよくわかんないんだっけ、アレ」
「うちの自警団が駆け付けた時はほぼ全滅、一面死体だらけで酷い有様」
「生き残りの話も支離滅裂だし……蜂の巣駆除しようとして祟られたんだー、とか、みんな蜂にやられちまったんだー、とか。完璧イカレちゃってるよ、ショックだったんだろね可哀想に」
「ううん、もとからアル中でしょアレは。完璧イッちゃってたもん」
「肝臓悪そうな顔色してたし……結局すぐぽっくり逝っちゃった、命拾いしたのにもったいない」
「崖を挟んで反対の道でも馬車が襲われたって。コヨーテだか野犬の仕業でしょ？」
「積み荷も荒らされて大損害だって」
「スワローだいじょぶ？　一人で帰れる？」
「怖いなら今夜は泊まってく？　もう遅いし」
「むしろ帰したくない的な？　あたしたちのために頑張ってくれたんだもん、ご褒美あげちゃうただでいーよ？」
あっというまに取り巻かれてちやほやされる。四つん張って札拾いに夢中だった娼婦たちもわっと詰めかける。スタジャンの袖を右に左に引っ張られ頭をなでまわされ頬と額と首筋に接吻を浴びせられ、色めきだった娼婦らに熱烈なラブコールを受けながら、スワローはそっけなく呟く。
「いや。帰るわ」
「「ええー!?」」
甲高い抗議の声を一蹴、肩越しに手を振って歩みだす。名

残惜しげに見送る女たちを、四十路女が「さあみんな、散った散った！　仕事に戻るよ！」とけしかける。
スワローたちがロータスタウン近くの採石場をねぐらにして約一か月が経過した。元々は良質の鉱石や石炭が採れる炭鉱街として栄えた街だが、今じゃすっかり寂れている。スワローはこの街で用心棒のまねごとをして収入を得ている。
彼が依頼を請け負うのは店に属さぬ弱い立場の街娼ばかりで、そういう娼婦たちに執拗に付き纏う悪質な客にお灸を据えるのが主な仕事だ。この街でスワローは大受けだ。惚れこんで誘いをかけてくる女も多い、ツレない態度がそそるんだそうだ。女心はよくわからない。
「稼げりゃどうでもいいけどな」
腕っぷしを見こまれ頼られるのは悪い気分じゃない。運が良ければ余禄にも預かれる。スワローは荒事向きの性分だ、人に暴力をふるうのにためらいがない。娼婦を下に見てあこぎなまねをする男は絶えず、従って用心棒の需要は増す一方だ。見てくれでなめてかかってくれれば好都合、先手を打てる。
スワローは肩で風を切って大通りを歩く。コヨーテアグリーとはご大層な名前だ。採石場にトレーラーハウスを停めて一か月が経過するが、コヨーテには終ぞお目にかかってない。絶滅したのか？
いや、コヨーテの消息などどうでもいい。今のスワローには他に考えなければいけないことがある。
街を出て少し行くと採石場が見えてくる。車で乗り入れるとまたややこしいことになるので宿泊場所には街外れを選ぶのが通例だが、それにしたって辺鄙なところだ。
足場の悪い岩場をスタジャンのポケットに両手を突っ込んだまま身軽に跳び伝い、闇に浮かび上がるトレーラーハウスに近付いていく。

兄と母と14年間暮らした家。
しこたま思い出の詰まった、移動式の我が家。（ホームスイートホーム）

「……」
子どもの頃に母と並んで語らった荷台と、ブラインドが下りた窓とをムッツリ見比べる。
『そんなのってない。ずるい』
ピジョンの悔しげな声が耳に甦る。卑怯な質問をした自覚はある。勿論わざとだ。あのヘタレがあそこで咄嗟にどちらかを選べるほど頭よくないと、最初からわかりきっていた。

なのになんで、こんなにむしゃくしゃするんだ？
そこは嘘でもいいから俺を選べよと思ってしまうのはどうしてだ？

喧嘩して飛び出して、そのまま夜遊びで時間を潰した。
用心棒のまねごとをしている間も、ずっと頭にあったのは哀しげに俯くピジョンの顔。世界が背負わせた悲劇に耐えるようなしょぼくれたツラ。

「……無理矢理ヤッたっていいんだ、別に」

実際そうするのは簡単だ。
それはもう笑ってしまうほど簡単で、だからこそ何の意味もない。

アイツから求めてこなければ意味がないと、ねだってこなければ本当の意味で勝ったとはいえないと分別が付くほどにはスワローも大人になった。まるで首枷のようにうざったく感じて、時々無性にドッグタグをちぎり捨てたくなるのと根は同じだ。三年前の約束はスワローの中でちゃんと生きてる。あの時アイツはなんて言った？　俺が14でアイツが16になったら潔く抱かれてやると啖呵を切ったじゃねえか。でもそれをこっちから持ち出すのはなんかすげえ負けた気がする。
なあ兄貴あの約束覚えてるかまさか忘れたわけじゃねえよなと満を持して切り出して、そらっとぼけるなら張り倒してやりゃすむこったが、素できょとんとされでもしたら……

『約束？　俺が開発した絶対ほどけない上に三秒で速攻できる靴紐の結び方を教えるって話？』
「あ〟あ〟あ〟あ〟あ〟あ〟あ〟あ〟ッ!!」

楽しみにしてたのは俺だけか？
待ち遠しくしてたのは俺だけか？

アイツにとっちゃコロッと忘れちまうくらいどうでもいいことを、一日一日数えて楽しみにしてたなんてふざけんな絶対に認めねェそれがバレるくらいなら舌噛みきって死んだほうがマシだ!!
やけにリアルに生々しく、いかにもあのアホが言いそうなアホなセリフが浮かんできて怒りが一瞬で臨界点を突破。両手足を振り回し地団駄踏み、声にならない絶叫を夜闇に放ち、頭を抱え込んでしゃがみこむ。
「……俺と母さんを秤にかけたらギリ母さんに傾く、それ

がアイツの本音だろ」
ドッグタグを握り込んで忌々しげに吐き捨てる。
どっちも選べないなんてズルい嘘だ。アイツの中じゃ優先順位がはっきりしてる、母さんを哀しませるのがいやだから本当の事が言えない、アイツは俺と賞金稼ぎになる夢を追いかけるよか母さんを泣かせる方がいやときた。
もしあのアホが本当にド忘れしてんならド忘れしてたから何も言いださないんだとしたら、今度こそ本当の本当にブチ殺してしまいそうで自分自身が抑えきれない。じらしてるんでも忘れてるんでもねえ、ただただそれが癪なのだ。
詰まるところ意地の張り合いだ。
ピジョンにとって自分は二番目に大事な家族で、どうあがいたって永遠の二番手で、母に劣る地位にすぎない現実を直視するのがいやなのだ。

スワローが遅く帰る頃には家族は寝ている。
兄はどうでもいいが母を起こすのは少しうしろめたい、どこで何してたかうるさく詮索されては面倒だしかったるい。
家族の安眠に配慮し、こそこそ人目を忍んでトレーラーハウスに上がる。
カーテンの向こうの気配に耳を澄ます。母は熟睡しているらしく規則正しい鼾が響く。

『母さんね、家族川の字で寝るのが夢だったの』
「……」
それが母の口癖だった。あんまりにもささやかでちっぽけな夢。

子供の頃は母を真ん中に挟んで三人で寝ていた。スワローは川の字を知らない。せがむ息子に母は空中に指で字をなぞって説明してくれたものだ。なんでも英語の川（リバー）をさす単語らしい。むかしむかし極東の島国から渡ってきたお客さんに教えてもらったのだと少し得意げに言っていた。
母が時々怪しい日本語を使うのも、少女時代に出会ったその人物の影響らしい。
『むこうでは親が子供を挟んで川の字になって寝るんだって。端っこの長い棒がお父さんとお母さん、真ん中の短い棒が子どもね。なんだか楽しそうじゃない？　親が子供を守ってるみたいで』
『でも真ん中は母さんじゃん。俺とピジョンが端っこで』
『じゃあスワローが真ん中になる？』
『……いい』
『あらなんで？』
あの時俺はなんて答えたっけ。もう忘れちまった、何年も

前のことだ。
いつしか母子三人で寝る事はなくなった。
いつまでも乳離れできないガキじゃない、親子三人ベッドでぎゅう詰めは狭っ苦しくてかなわない、ピジョンとベッドを使ってる今だって寝返りのたびに肘や足があたるのだ。
川の字の習慣を卒業してだいぶ経つ。
スワローは複雑な表情で閉め切られたカーテンの向こう、母が眠りに就いてるはずのベッドを見詰める。
子供の頃はぼんやりとしか母の仕事を理解してなかった。
あのカーテンの向こうで母が何をしているのか、覗きに行こうとしては兄に羽交い絞めにされたものだ。生きながら押し潰されているかのような喘ぎ声にてっきりいじめられてるものと勘違いし、突っ込んでいきかけたのも一度や二度じゃない。
母さんをいじめるヤツは許さねぇ、俺が守る。
ふしだらでだらしない、頼りなくてダメダメな俺の母さん。
料理の腕は最悪で、見た目も味もエグい飯しか作れない俺達の母さん。
恋人に接するような態度で子どもに甘え、ハグとキスをくりかえし猫かわいがりする。そんなべたべたと甘い母を鬱陶しがるのと同じ位、厄介な愛着を感じてもいる。
ストロベリーソーダの中でゆっくり窒息、溺死していくような依存の感覚。体に毒だとわかりきっていててもやめられない、愛情という名前の中毒性のある甘味料。

『行こうか、スワロー』
客が訪れる都度ピジョンはスワローを宥めすかし外へと連れだした。
そして母が一仕事終えるまで、辛抱強く遊び相手になってくれた。
『母さんは仕事中だから邪魔しちゃだめだよ。いま友達が来てるんだ、いい子にできるだろ？』
口の前に指を立てしーと諭すピジョン。靴紐の教え方はその時にレクチャーされた。
ある程度年がいってからは自発的に表にでるようになった。母に迷惑をかけるのは本意でない。好奇心に負けて窓から覗くことは何度もあったが、スワローもピジョンも母の負担になりたくないという一点では同意していた。
自分の境遇が特別悲惨だとも格別陰惨だとも思わない、もっとひどいヤツはごろごろいる。
三年前に遭遇したレイヴン・ノーネームの記事を読んだ。アイツの生い立ちも相当だ。レイヴンは孤児院育ちの捨て子で、そこでも疎外され孤立していた。レイヴンと同期の子供が謎の失踪を遂げており、ごく最近になって孤児院の

裏庭から白骨が発見されたことから、それも彼の犯行ではないかと疑われている。
上を見ればきりがなく、下を見てもきりがない。けれどもこれだけは断言できる。
スタジャンのポケットから愛用のナイフ……レイヴン・ノーネームの犠牲者の名前をとってレオナルドと呼んでいる……を引き抜き、軽く投げ上げる。旋回して戻ってきた柄をキャッチ、突き放すよう呟く。
「被害者を作る被害者は加害者だろ」
レイヴン・ノーネームは自ら身を滅ぼした。不幸な生い立ちは彼のせいじゃないが、失明に至る破滅は彼自身が招いた行いだ。高すぎる代償とは思えない。ヤツには慈悲深い結末だ。
レイヴンの両目をナイフでかっさばいた時、スワローは絶頂を感じた。
復讐が実った快感は筆舌尽くし難い。
損を覚悟の捨て売り……サクリファイス。レイヴン・ノーネームは被害者（ヴィクテム）であると同時に加害者であり、己の良心を生贄（サクリファイス）に捧げて怪物に生まれ変わった愚かな男だ。
スワローの処女を奪った、憎んでも憎み足りない因縁の相手でもある。
「最悪の初体験だ。思い出したくもねェ」
上書きするにはまだまだ経験が足りない、刺激が足りない。厳密にはレイヴン自身が奪ったんじゃないが同じことだ。
ベッドに縛られケツに死体の歯とナイフを突っこまれた体験に纏わる壮絶なトラウマは骨の髄まで刻みこまれ、たまに悪夢を見せる。夢の中でスワローは暗闇にいる。真っ暗い寝室に監禁され、ベッドに手錠をかけられ、影になって見えない男に犯されている。けれども男は絶対に最後までしない。男は道具を使ってスワローを辱めるのを好んだ。ある時は歯、ある時はナイフの柄。スワローの尻に次々異物を挿入し、内臓を軋ませ痛がる様子に悦に入る。
『ほらほら、レオナルドが入っていくよ。君のお尻をぐちゃぐちゃに犯しているよ』
「うるせえ黙れおんぼろカラス野郎」
頭の片隅に巣食った亡霊が粘着に囁く。当時を回想すると苦い胃液がせりあがる一方、下半身が浅ましく昂っていく。刺激を欲しがって尻の穴が疼く。
ピジョンの事を淫乱だ変態だと罵れない、挿れるのと同じく挿れられる気持ちよさをスワローは知ってしまった。
行きずりの男女と刹那的なセックスに淫する中で、過去からこだまする呪わしい囁きを打ち消そうと努めたが、アレに勝る刺激にはなかなか巡り会えない。
スワローはペースを上げてナイフを回す。

空中で旋回するナイフを手で受け止め、ワンタッチで飛び出した刃を翳す。
このナイフを持っているのは、魂に烙印された復讐への渇仰を忘れないためだ。
賞金稼ぎになるというあの夜の誓いを忘れないためだ。

『お前も。汚れてるなんて思ったこと、一度もない』
今夜もゲスを殴り倒したこの手で。
返り血と他人の体液に塗れたこの手を見ても、そう言えるのかよ。

「ッ……」
兄の優しい嘘がスワローの裡に巣食う情欲の獣を目覚めさせる。
アイツはずるい、俺のことなんか何も知らない、なんにもわかっちゃないくせに。
ナイフの柄を握る手が軋み、指が白く強張る。
ナイフを扱うのは造作もないのに、アイツに触れただけで手のひらが熱くなる。アイツはナイフほど頑丈にできてないから、肩を握り潰すのなんざきっとワケない。
無造作に雑誌を蹴りどかし、脱ぎ散らかされた服を踏み越えていく。
スワローはわざと兄と生活時間をずらしている、アイツと顔を合わせるとむしゃくしゃして自分を抑えきれないからだ。
この頃は兄が寝入った頃に帰り、背中を向けてふて寝する。ピジョンだってこっちを避けてやがるからお互い様だ、アイツはこの所ひどくびくびくして前にも増してうざったい、ちょっと声をかけただけで跳びあがって角に足の指を強打する始末だ。
約束の期限がすぎたから？　単なる思い過ごし？　どっちだよ、はっきりしやがれ！　どちらか判じかね態度を決めかねているスワローにしてみれば生殺しの極みだ。
ベッドの前に到着。ブラインドの隙間から青白い月光がさしこみ、無防備にシャツをはだけて熟睡する、ピジョンの身体を洗っている。
「……俺がいなくてよかったな。安心したろ？」
ベッドの際に腰かけ、しあわせそうに眠りこける兄の頬に手をのばす。規則正しい寝息と共に緩やかに上下する胸……寝乱れたシャツの襟ぐりから皮膚に包まれた鎖骨の突起と、そこに這う鎖が覗く。
「ベッドもひとりじめできるし。ゆったり手足をのばして熟睡できるし」
ピジョンに語りかけふざけて頬をぺちぺち叩く。

返事はない。兄は一度眠ったら起きないたちだ。それをいいことに悪戯心が騒ぎだす。
俺の気も知らないで、マジでムカツク。
ぎしり、ベッドが軋む。ピジョンの胴を挟んで膝立ち、刃を寝かせて頬に滑らす。
冷たくなめらかな鋼の質感に、ほんのわずか眉根が歪む。
頬に沿って刃をおろし、極端な緩慢さで引き締まった首筋へ伝わせ鎖にひっかける。
「……なあ。寝てンの？」
体の奥底でちりちりと炎が燻る。
腰の奥が粘ついて、なにもかもをぶち壊したい暴力衝動と結び付いた欲望が昂っていく。
スワローはナイフを器用に使い、兄の身体の表面をすみずみまで舐め尽くす。
剥き出しの頬から首筋、綺麗な鎖骨のラインを経て、シャツの上から胸板と腹筋を撫でさする。ちょっとでも身動きしたら万事休す、寝返りなど打とうものなら大参事だ。そのスリルがたまらない。シャツの裾に切っ先をひっかけ、刃の表面で素肌を掠めれば、ピジョンがじれったげにもぞつく。
「う……」
「ナイフになでられて感じてンの？　やらしー体」
気のせいか息が上擦ってきた。顔も紅潮している。
ナイフで悪戯され、寝ながら感じはじめたピジョンの痴態がスワローを焚きつける。
静かに裾をめくり、刃の表面をピンク色の乳首に押し当てる。
「ふっ……ぅ」
「動くと切れるぞ」
乳首が圧し潰され、赤らんだ寝顔が切なく吐息する。
片手に持ったナイフを兄の脇腹に添えたまま、もう片方の手で下着ごとズボンをずりおろす。
ボクサーパンツの中へ手を突っ込み、湿り気帯びた違和感に眉根をよせる。
「……てめぇ、俺がいねーあいだにオナったな？」
腰に密着するパンツの中は既に蒸し、よく目を凝らして観察すれば中心に恥ずかしいシミができている。
「自分で慰めるくれーならなんで言わねーんだ、相手してやるのに」
むしゃくしゃがむらむらにとってかわる。
兄の自慰の痕跡に興奮するなんて異常だ。それがどうした？
ボクサーパンツに染みついた生乾きの残滓に鼻を鳴らし、ゆっくりと手を動かし始める。
「ふぁ、ぅあ」

「知ってる？　一回イッたあとはめっぽう感じやすくなるんだと、下拵えご苦労さま」
びく、とピジョンが震える。
目尻に淫蕩な朱がのぼり、喉が仰け反って唇が薄く開かれる。ピジョンの股間を夢中でまさぐりながら片手のナイフを意識、ジーンズ越しに太腿に滑らす。起きるか？　大丈夫、セーフだ。スワローは逸る気持ちを抑え、自分のズボンを下ろし、勃起したペニスをさらけだす。
トランクスから勢いよく飛び出したペニスは、さんざん兄の淫らな寝姿を見せつけられ透明な我慢汁を滴らせている。熱く脈打つ肉棒をジーンズの内腿に擦りつける。
デニムのざらつきにやすりがけられ鋭い性感が走り、ナイフを預けた手元がうっかり狂いそうになる。
「うあ、んぅ、っく……」
何をしてるんだ俺は。
兄貴の寝姿をズリネタにオナってる。
ピジョンもまんざらじゃない様子で、スワロー自身を擦り付けられるたび甘ったるく喘いで反応を返す。ペニスをなすられた内腿に透明な粘液が付着、デニムの色が濃くなる。内腿を遡って足の付け根に至り、許してもらえないキスの腹いせに鈴口同士を接吻させるよう、ペニスの先端を激しく擦り合わせる。
「ぁうっ、あ！」
「っ……すっげェいい。見ろよピジョン、俺のとお前のが一本の糸で繋がってら」
ゆるみきった口の端から一筋よだれをたらし、もどかしげにシーツを蹴立てるピジョン。一回イッた体は腰の奥に火照りを持て余し、すぐに火がつく。
ペニスの先端が透明な粘液の糸で結ばれ、揉みくちゃに擦り立てるごと強烈な快感が生じる。
鈴口同士をぐりぐりとねじりあって、カリ首の括れをまとめて持って、先走りに乗じてぬらつく裏筋をくりかえし擦り上げる。俗にいう兜合わせだ。
ピジョンの性感帯は手に取るようにわかる、だてに十代のとっかかりから仕込んでない。弟の手で皮を剥かれ、調教に馴らされた身体はひどく快楽に貪欲で、睡眠中でも節操なく性器への直接的な刺激に催していく。
尻の穴を使わない疑似的なセックス。シャツの裾が捲れあがって、尖りきった乳首がスワローの位置からまる見えだ。
「ふ」
「ふぁ……」
ピジョンが唾液の糸で繋がる口を開き、また閉じ、それをくりかえす。搾り出された熱い吐息は切なく潤んで、こじ開けられた膝に震えが伝い、小揺るぎする腰が堪え性なく

欲しい欲しいと訴える。キツく瞑った目元は、自分を翻弄する熱流の正体がわからず限りなく恐怖に近い戸惑いを濃くしている。生殺しの淫夢にうなされ歪むやりきれない表情。

互いの汗とカウパーが混じりあった体液が捏ね回され、ぐちゅぐちゅと卑猥な水音を立てる。ピジョンのジーンズの内腿はすっかり濡れそぼって、パンツの中まで漏らしたみたいに大洪水だ。

ふと先刻の醜男の失禁がぶり返し、こんな時だってのに笑いたくなる。

「……は……ぐちゃぐちゃのどろどろになってんのわかるか？　聞いてみろよ。ちょっとさわっただけでこのザマだ、寝ながら勃たせまくってよ。俺と兄貴のが擦れてンの、わかる？　太さは俺の勝ち、長さは譲ってやる」

ピジョンの目尻にうっすらと涙が滲み広がり、しっとり湿った前髪が揺すられるごと跳ねる。

唾液が糸引く口が「あっあっ」と喘ぎをもらし、股間に押し付けられる肉棒の抽挿に無意識な動きで応じていく。

「はぅ……ぁう」

びくびくと腰を上擦らせ、シーツの上を背中で這いずり、膨らんだカリ首をひくひくとわななかせる。

夢なのか現実なのか、ペニスをしごき立てる快感と、全身をドロドロに侵す熱に朦朧として口走る。

「や、すわろ」

やばい、でる。

「う」

咄嗟にペニスの位置をずらし、ピジョンの腹の上に射精する。

寝言で名前を呼ばれた瞬間、果てた。ピジョンの痩せた腹筋に大量の白濁が飛び散る。

「はあっ……はあっ……はあっ」

犬のように息を荒げるスワローの真下、ピジョンの寝息が次第に安らかに戻っていく。たった今自分の身に降りかかった災いなど一切知らず、腹筋を濡らす違和感にほんの少しむずがって脇腹を掻く。

ふやけきった寝顔を目の当たりにし、凄まじい自己嫌悪と虚脱感が襲う。ピジョンのシャツを掴んで乱暴に腹を拭いてからパンツとズボンを直し、自分もさっさと服を身に付けていく。

「……テメェが悪いんだぞ。煽るようなまねしやがって」

最後までヤッちまおうか？

悪魔の誘惑が一瞬脳裏を掠めるも、実行するにはリスクが高すぎる。夜這いをかけたら激しく抵抗されるだろうし、兄はスワローと同じベッドに寝るのを金輪際拒絶するだろ

う。
規則正しい寝息をたてる唇を物欲しそうに見つめ、顔の傍らに手をついて付け狙うも、触れ合う寸前にひっこめる。
「……チッ」
寝てるヤツから奪うのは簡単だ。だからこそ何の意味もない。求めに応じないキスなど虚しいだけだ。
べとつく指をいやがらせにピジョンのジーンズになすりつけ、背中を向けて毛布を纏う。
こんな状態は長くは続かないだろう。